

こころ

14歳の発見

先月号で中3の2人が夢の実現のために大きな決断をして一步踏み出すということを書きましたが、今月中2を題材に書こうと思います。14歳の話です。

まず、中2で連想するのは、「中2病」というネットスラング。20年以上前に生み出された言葉で、自分が願ったことは何でも叶うと思ひ込む全能感に支配されていたり思春期の頃にありがちな空想や好みにとられ現実的な判断や行動に踏み出せないでいたりする状況に向けられた言葉です。先月「マツコの知らない世界」で世界的DJのナイトテンポさんが自らを「中2病かも」と使っていました。私の知人も「中2病から早く目を覚ませ」などと生徒に言っていました。今思うと言われた子は、心ない言葉に傷ついていたかも。

親や教師をもちろん含め、周囲の大人の心ない言葉は、多感な時期の子には大きな影響を及ぼします。心の混乱が長引いたり自暴自棄になったり無気力になってしまったり。

次に中2で思い浮かぶのが「100分de名著」というNHKの番組で少女漫画家の萩尾望都さんの特集の際『トーマの心臓』の登場人物らを解説している中で、夢枕獏さんが「13歳では子供過ぎる。15歳だと色気が出てくる。14歳であることに意味がある。」と発言。14歳を主人公にすることの絶妙。『ポーの一族』エドガーも14歳。バンパネラになって時を止められました。永遠に14歳を生きています。チコちゃんではないですが、永遠の14歳。

子どもと大人の境目。これがここで言いたいことです。本当に繊細な時期ですね。

3つ目は、エヴァンゲリオン。27号でも少し書いていますが、14歳の少年が主人公。テレビ版が1995年10月4日開始、そしてついに『シン・エヴァンゲリオン劇場版』2021年3月8日で完結。主人公碇シンジは、優柔不断で臆病な少年。自分に自信がなく、父との確執が織り込まれ、25年の長き14歳でありました。14歳にとって、親との問題は、実に大きい。親からの影響は14歳に限らず、ある意味一生続くものかも知れませんが、14歳という親からの自立が始まるこの時期は、友人との関係以上に重要な意味を持っているかも知れません。

(庵野秀明展：万代島美術館→)

ここまで書いて、ふと思ったのは、みんな少年であり、少女ではなかったなということ。綾波レイは、主人公と同級生の14歳の少女の設定ですが。

いずれにしても14歳というのは、微妙な年齢、繊細さが際立つ年齢ということ。子ども扱いではなく、人格を尊重し、きちんとした対応をすることが大人に求められるでしょう。そして14歳の当人としては、今、そういう時期のまっただ中にいるのだという自覚、もし、今辛いと感じていても、この時期はいつまでも続くわけではないという意識や見極めも必要なかも知れません。

ちなみに小説「14歳」(千原ジュニア)もあります。あ、これも少年でした。

